

声で協力させていただいて、私は何と多くのものを貰ったことでしょう。例えば、①相手のニーズに応じて本を読むということは、自分ではとても手を出さない本をも読むことであり（つまみ食い程度だが）世界を広げてもらえた。②決められた日時に図書館へ行き、2時間ぶつづけで相手にわかるように本を読むためには、心身のコンディションを整えて臨まねばならない。それがひいては健康につながる。③私が目の代わりをし二人三脚で本を読んだ目の不自由な方々、そして担当職員の方々との出会いがあって、私を必要してくれたことに心があつくなる、などです。

さて、新図書館にのぞむこと。「素晴らしい対

面朗読室ですよ」とおききして楽しみにしているのですが、最も大切なことはそこでどんなサービスがなされるかでしょう。新図書館は都心から離れたことで、図書館利用にハンディキャップを持つ人達に対して、ひとつマイナス条件を背負い込んでしまいました。それを補って余りあるサービス、つまり健常者と同じように、求められた資料はいつでも提供できる状況をつくり出してほしいものです。

ところで、私、年とともに記憶力、視力が衰えており、音声訳者としての適性を欠くのではないかと、目下“荒本”との関係を考えているところです。

（武田 瑠美）

いま、自動車文庫のことをおもう

私が自動車文庫の係に配属されたのは昭和55年4月のことです。府内の多くの市町村で図書館がととのい、府立図書館の自動車文庫がその役割を終えたといわれ、撤退をはじめる少し前の時期でした。

同じ府立の、中之島という歴史ある図書館の、歴史ある資料の書庫出納などを担っていたセクションからの異動で、その雰囲気のちがいに少しおどろきました。夕陽丘図書館には中之島図書館にないセクションとして、児童室や視覚障害者への対面朗読、特許資料室、それにこの自動車文庫係などがあり、それはよく言えば多様性に富んだ、言いかえれば雑然とした図書館といった印象でした。

自動車文庫の担当は、出勤が月に12回ほどあって、朝9時半頃出発、帰館は4時頃と、出ていることが多くあわただしい職場でした。配属されて初めて出勤したのは河内長野市の駐車場で、出かける前に課長から「自動車文庫はそれだけで図書

館、いまから図書館長だ」と、恫喝かたがたの激励を受けて出発したことをおぼえています。

言われてみればそのとおりで、車にのせる本の購入から、車への配架、そして駐車場での貸し出し、館にかえってからの統計や予約の本の処理など、おおむねひとりでこなさなければならず、忙しくもありましたが、楽しい毎日ではありました。

自動車文庫は、平成2年の3月に最後の一台が廃止となりその任を終えました。自動車文庫は終焉となりましたが、5台の車がまわっていたときに購入した図書や、それ以外に読書会用にと買い揃えた図書がいま、「読書会用図書」として、約8千タイトル2万3千冊ほどあり、それは市町村の図書館を通じて府内各地域の読書会に利用してもらっています。自動車文庫が府内を巡回したことで、少しでも地域の図書館の創設にお役にたったと信じたいとおもいますが、このようにして廃止となった自動車文庫が、いまそのなごりとして残されたものといったらこの図書群でしょう。

敗戦後復興期の昭和26年12月にはじまり、本をつんで走りに走って39年、当館編『さようなら自動車文庫』によれば、走行の距離は120万キロといいます。この戦後の時代を自動車文庫は、夢や希望、教養や娯楽、大衆社会化といわれて消費の読書、などなど様々な「読書生活」を載せて走り続けたのですが、私もその車に乗る機会を得て、わずかながらも、〈時代〉に同伴することができ、ほんとによかったと思っています。（岡村 敬二）

